

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：25406
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：19H04382
研究課題名（和文）スポーツイベントのレガシー効果に関する観光地理学的研究

研究課題名（英文）A geographical study of sporting event legacy

研究代表者

和田 崇（WADA, Takashi）

県立広島大学・地域創生学部・教授

研究者番号：20511091

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の地方都市で開催された国際スポーツイベントが開催都市に残したレガシーを検証した。1994広島アジア競技大会と1995福岡ユニバーシアード大会、1998長野冬季五輪、帯広市の国際スピードスケート大会の分析を通じて、イベントレガシーはスポーツ領域と非スポーツ領域の両方でローカルからナショナル、グローバルまでのスケールで創出され、20年以上も存続するものがあることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は日本の地理学におけるスポーツ研究の確立・発展に貢献するとともに、学際的に推進されている国際スポーツイベントのレガシー研究の充実にも資するものである。また、2020東京五輪の開催をめぐる社会動向やそれらに関する議論を踏まえて、国際スポーツイベントの開催意義や招致方法に対する社会的関心が高まる中で、本研究の成果はそれらのあり方を検討するための枠組や国際スポーツイベントの成果を検証する際の考え方を提示できた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the legacy left by international sporting events held in local cities in Japan. Case studies of the 12th Asian Games Hiroshima 1994, the 18th Universiade 1995 Fukuoka, the 1998 Olympics Winter Games in Nagano and speed skating competitions in Obihiro, Hokkaido were conducted. As a result of the case studies, legacies in sports and non-sport fields were confirmed at local, national and global scales, and some legacies of over 20 years were also confirmed.

研究分野：人文地理学

キーワード：スポーツ イベント レガシー 政策 市民 競技文化

1. 研究開始当初の背景

2002年からの国際オリンピック委員会 IOC によるレガシーの重視や、2017年に文部科学省が発表した「オリンピック・パラリンピックレガシー創出に向けた文部科学省の考えと取組」に象徴されるように、近年、スポーツイベントの開催やスポーツ施設の整備が当該地域にもたらすレガシーに対する社会的関心の高まりがみられる。

一方、地理学のスポーツイベント研究やレガシー研究は端緒についたばかりで、欧米諸国以外で開催されたスポーツイベント等の事例分析と地域(都市)間比較、長期間にわたる効果分析などが今後の研究課題となっている。

以上から、スポーツイベントが開催都市にもたらすレガシーを検証することは社会的にも学術的にも必要性が高いと考えられる。特に、研究蓄積の乏しい日本開催イベントの事例分析を行うこと、長期的な観点(=持続的な地域経営)からレガシー効果を検証することは、社会的にも学術的にも意義が大きいと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、「スポーツイベントやスポーツ施設のレガシー効果に日本独自の特徴がみられるのか」「スポーツイベントやスポーツ施設は日本における持続的な地域経営にどのように(どの程度)結びついているのか」という上記の問いに答えるため、日本の地方都市で開催された大規模スポーツイベントが開催都市にもたらしたレガシーを検証し、今後の地域スポーツイベントの開催戦略を提起することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、4都市を対象とした詳細な事例調査を4か年かけて行った。対象都市はイベント開催効果が直接的に現れやすい地方都市、対象イベントは長期的な効果把握のために開催から10年以上経過するイベントとした。具体的に、1994年に広島市で開催された第12回アジア競技大会、1995年に福岡市で開催された第18回ユニバーシアード大会、1998年に長野市および周辺地域で開催された第18回冬季オリンピック・パラリンピック、1985年の施設整備と2009年の大規模改修以降に北海道帯広市で国際スピードスケート大会を分析対象とした。

これら4事例について、資料調査やヒアリング調査、アンケート調査等を通じて情報を収集した上で、時間(短期-長期)と空間(ローカル-グローバル)、領域(一元-多元)の観点から、それが開催地にもたらした影響を検証し、今後のイベント招致・開催のあり方を展望した。

そして、シンポジウム「国際スポーツイベントのレガシー-時間・空間・領域-」を2022年11月に広島市で開催して、事例研究で得られた成果を公表するとともに、地理学者やスポーツ政策担当者などと今後の国際スポーツイベントの招致、開催のあり方について討議した。

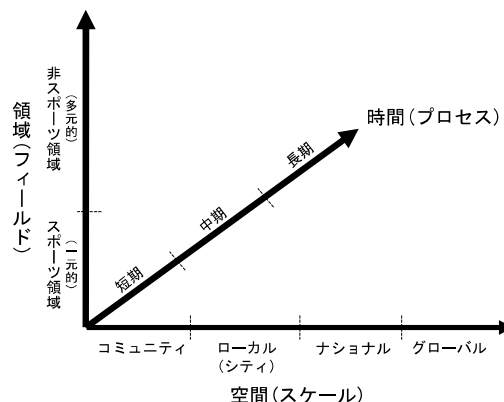


図 本研究の分析視角

4. 研究成果

(1)北海道帯広市

北海道帯広市では、スピードスケート国際大会がもたらしたスポーツ的レガシーを時間と空間の観点から検討した。

ローカル(帯広市)レベルでは、短期的にはジュニア選手がトップ選手の滑走をみて世界との実力差である“距離”を認識するとともに、トップ選手に対し憧れを抱く。このことは帯広市からの有望選手の輩出にも寄与し、スピードスケート競技文化とスケート王国ブランドを長期的に維持するレガシーに結びついていた。ナショナル(日本)レベルでは、国際大会が競技界の最新動向を知る機会となり、大会運営ノウハウや審判技術を獲得・更新する。この点に加え、国際連盟基準での施設整備を実現することで、継続的な国際大会招致に結びつけていることが確認できた。大会の継続的招致は、日本人トップ選手の長期的強化にも寄与していた。グローバルレベルでは、帯広市がアジア、世界における大会開催地としてスピードスケート競技を支えていた。

これらのレガシーが検証された一方で、世界との競技力の差の認識やトップ選手への憧れの醸成以外のレガシーが創出されておらず、国際大会を地元ジュニア選手の育成に十分につかきれていないという課題も残されている。

(2)長野市および周辺地域

長野市および周辺地域では、アルペンスキーとノルディックスキーの2種目をとりあげ、スキー競技開催地域において長野冬季五輪のレガシーがどのような意味を有するのかを検討した。

スキーの五輪競技施設は有形レガシーとして維持されているが、その傾向はノルディックスキーで強い。アルペンスキーでは、五輪競技開催スキー場で競技とゲレンデスキーとの間に利用競合が生じている。

スキー競技開催地域は選手育成の伝統のもとで、その仕組みを構築してきた。中学生スキー選手は、長野冬季五輪の閉幕後はアルペン種目では成績が伸び悩んでいたが、ノルディック種目で継続的に良い成績を残している。ただし、ノルディック種目の好成績は、五輪選手の育成にはあまり結びついていない。

スキー選手育成の伝統に対して、長野冬季五輪のレガシーが与えた効果は、五輪開催地域というローカルな地域において、ノルディックスキーでより強く認められた。これは日本独自のスキー文化、すなわち、一般の人びとが楽しむスキーは、日本ではアルペンに著しく特化しており、逆にクロスカントリースキーの競技性が高いことと関係している。

(3)福岡市

第18回ユニバーシアード大会の招致活動が開始された1980年代末は、福岡市政の重要な転換点であったといわれ、それ以降の都市政策にはユニバーシアード大会の影響を見出すことができる。その具体例として、ユニバーシアード大会が福岡市のアジア政策とコミュニティ政策に与えた影響を分析、評価した。

アジア政策への影響については、アジア太平洋博覧会に引き続いて開催されたユニバーシアード大会は、他のアジア関連事業とともに「交流」を強調した国際都市づくりに活用された。大会後も、ユニバーシアード大会で一定の成果を得た「交流」を継続して「活力あるアジア」と「共生」することをめざすアジア政策が展開された。

コミュニティ政策への影響については、ユニバーシアード大会をきっかけに生まれた国際交流活動が定着した高取校区の事例を確認した。ユニバーシアード大会に合わせて実施された「校区ふれあい事業」は校区住民の国際交流活動への関心を高めた。そして、留学生の同校区への居住をきっかけに国際交流活動が開始され、その活動は在留外国人と校区住民の共生を推進する校区独自の取り組みとして定着した。

(4)広島市

1994年に開催された広島アジア競技大会が広島市にもたらしたレガシーを時間、空間、領域の観点から検証した。

その結果、地域スポーツの振興、国際大会の招致・開催、市民主体の国際交流活動といった広島アジア競技大会のレガシーは、ローカルレベルを中心とする空間において関連領域のさまざまなアクターがかかわりながらつくり出されたことが確認された。また、それらはナショナルまたはグローバルレベルの政策の後押しを受けて具体化したことも確認された。

これに時間の観点を加えてみると、以下の3点が明らかとなった。第1は、大会自体が当時の「新しい開発」物語に即して招致・開催されたことも含め、当時の政策的潮流に乗る形でレガシーが創出されたことである。第2は、それらのレガシーが大会開催前に計画されたわけではなく、主に大会開催後のさまざまなアクターの相互作用を通じてつくり出されたことである。ただしそれらは、広島アジア競技大会後に偶発的産物として生まれたわけではなく、大会開催前から存在した制度や組織、事業などをベースに、大会開催を契機にアップグレードされたり、新たにつくり出されたりしたものであった。第3は、それらのレガシーが政策の変更や社会情勢の変化、担い手の高齢化にともなって時間の経過とともに変化したり、消失したりする可能性があることである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 和田 崇	4. 巻 16
2. 論文標題 平和都市広島におけるスポーツイベント開催の意義 - 「平和」の創造と発信 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 E-journal GEO	6. 最初と最後の頁 310-326
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4157/ejgeo.16.310	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小島大輔	4. 巻 8
2. 論文標題 福岡市の国際都市づくりにおける1995年ユニバーシアード大会の意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪成蹊大学紀要	6. 最初と最後の頁 93-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 和田 崇	4. 巻 15
2. 論文標題 1994年広島アジア競技大会の無形遺産 - 一館一国運動の25年 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 E-journal GEO	6. 最初と最後の頁 175-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4157/ejgeo.15.175	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 和田 崇	4. 巻 13
2. 論文標題 広島市におけるスタジアムの立地とその変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 県立広島大学経営情報学部論集	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 呉羽正昭	4. 巻 14
2. 論文標題 日本における山岳ツーリズムの特性に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 観光科学研究	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊瑛季・安村健亮	4. 巻 34
2. 論文標題 北海道十勝における連続テレビ小説「なつぞら」による観光空間の形成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第34回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 277-280
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田 崇	4. 巻 17
2. 論文標題 1994年広島アジア競技大会のレガシーとしてのスポーツイベントボランティア	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 E-journal GEO	6. 最初と最後の頁 286-302
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4157/ejgeo.17.286	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田 崇	4. 巻 75
2. 論文標題 国際スポーツイベントは地域スポーツ振興のカンフル剤となり得るか - 広島アジア競技大会の事例分析 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒澤俊平・吉野広人・柿沼由樹・肖 錦萍・SHEN Yifan・石井久美子・呉羽正昭	4. 巻 45
2. 論文標題 長野県浅間温泉における共同浴場の利用変化とその要因	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地域研究年報	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 和田 崇
2. 発表標題 広島アジア競技大会のレガシー - スポーツイベントボランティア -
3. 学会等名 2022年日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小島大輔
2. 発表標題 スポーツとまちづくりの研究課題の検討
3. 学会等名 大阪成蹊大学スポーツイノベーション研究所月例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田 崇
2. 発表標題 1994年広島アジア競技大会のソフトレガシー 1館1国運動の25年
3. 学会等名 経済地理学会西南支部例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 和田 崇
2. 発表標題 広島市でスポーツイベントを開催することの意義
3. 学会等名 2021年日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉沢直・黒澤俊平・佐藤大輔・Jeanne Bolzinger・呉羽正昭
2. 発表標題 フランスアルプスにおけるバックカントリースキーの特性 - グルノーブル周辺山域におけるルート分析 -
3. 学会等名 日本スキー学会第31回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島大輔
2. 発表標題 1995年ユニバーシアード大会を活用した福岡市の国際都市づくり
3. 学会等名 2021年日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊瑛季
2. 発表標題 北海道十勝におけるスポーツイベント開催によるスケート文化の強化
3. 学会等名 2021年日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田 崇
2. 発表標題 1994年広島アジア競技大会のソフトレガシー 1館1国運動の25年
3. 学会等名 経済地理学会西南支部3月例会(熊本大学)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊瑛季・安村健亮
2. 発表標題 北海道十勝における連続テレビ小説「なつぞら」による観光空間の形成
3. 学会等名 第34回日本観光研究学会全国大会(名城大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊瑛季
2. 発表標題 北海道十勝地方の民間事業者によるスピードスケート選手雇用の意義
3. 学会等名 日本氷上スポーツ学会第4回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和久貴洋
2. 発表標題 東京2020後のスポーツ政策 国際競技大会レガシーの創出・持続のために
3. 学会等名 2022年度地理科学学会秋季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊瑛季
2. 発表標題 北海道帯広市におけるスピードスケート文化と国際大会開催のレガシー
3. 学会等名 2022年度地理科学学会秋季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 呉羽正昭
2. 発表標題 1998年長野オリンピック開催地のレガシー - スキーリゾートの例を中心に -
3. 学会等名 2022年度地理科学学会秋季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小島大輔
2. 発表標題 福岡市の都市政策からみた1995年ユニバーシアード大会のレガシー
3. 学会等名 2022年度地理科学学会秋季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和田 崇
2. 発表標題 非日常から日常へ - 広島アジア競技大会1994のソフトレガシー -
3. 学会等名 2022年度地理科学学会秋季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和田 崇
2. 発表標題 札幌冬季五輪2030：推進する側の論理と反対する側の論理
3. 学会等名 2023年日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小島大輔	4. 発行年 2022年
2. 出版社 創文企画	5. 総ページ数 24
3. 書名 スポーツまちづくりにおける研究課題 - スポーツの地域資源化と「つかうスポーツ」 - (所収 大阪成蹊大学スポーツイノベーション研究所編『スポーツとまちづくりのイノベーション』)	

1. 著者名 呉羽正昭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 道和書院	5. 総ページ数 22
3. 書名 スキー研究 100年の軌跡と展望 (担当：ツーリズム)	

1. 著者名 呉羽正昭	4. 発行年 2020年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 8
3. 書名 山岳科学 (担当：山岳ツーリズム)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡邊 瑛季 (WATANABE Eiki) (30845558)	宇都宮共和大学・シティライフ学部・講師 (32207)	
研究分担者	呉羽 正昭 (KUREHA Masaaki) (50263918)	筑波大学・生命環境系・教授 (12102)	
研究分担者	小島 大輔 (KOJIMA Daisuke) (80551770)	大阪成蹊大学・経営学部・准教授 (34437)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関